

# 紙上法話

## 無上を行わず

センター布教師 安養寺

渡辺 勝人



文才が無い故、文章の作法も成っていない。いい年齢をして、後輩から冷やかされない様にとかで、いよいよごちなくなってしまう。

沢木老師・内山老師の提唱の御本を拝読致しますうちに、卒論ではありませんが、丸写しをしたくなります。日頃無精してしまっている。やれと言われて仕方無しに行持をやる。

こう言うことでは全く申し訳無いのに、のらりくらりが関の山である。理屈より、事実が先だ。恰好はどうでもよいのである。

昨年末、上京のついで、歌舞伎座で観劇をして、久し振りに堪能しました。

菊之助主演の幕物で女形であった。背は高いし、美男ではあるし、いずれ将来をしょって立つ、大看板になるであろう。大変たのもしく思いました。科白・所作大変である。五つ六つからの稽古の賜である。私はお寺でよかったと思う。

まさに人間国宝の称号を授与させてあげたい気持ちになります。役者は大変である。

思いおこせば、私の駒大の入学は昭和三十一年であります。

その頃の歌舞伎界は、彼の祖父達が第一線であられたろう。つまり梅幸さん、十七世羽左衛門さん、十一代團十郎さんとか、また先代三津五郎さん、同じく左團次さんと争々たる顔ぶれでしたと言いますのは、田舎では見られ無いものに関心が湧き、無踊「流星」と言つのを、十七世と現富十郎がしたのを見て病みつきになりました。金は無いの学生生活の中で、幕見が一生懸命でした。先代の金馬さ

ん、人形の文五郎、能の喜多実の半部、玉川勝太郎天保水滸伝等々、本家の仏教学専攻は、怠り勝ちすぎました。そんな時でした。

上野不忍池畔、総検造りのお屋敷で、横山の表札、日本画壇の雄・大観画伯のお住居、すごいと思いました。目をみはりました。

それが、今回観劇の途次、往古の建物は一般者への展示会場として、入館出来るようになっていきましたが、当時の面影は遠く霞むに似て廃屋に近いと申しては失礼ですが、第一回文化勲章の覇者であられた生家の保存を国なり都は、何かの援助の手を述べられておるのでしょうか。とても淋しく感じました。

それに比べましてすごいのが、羽左衛門さんのところである。橘屋一門である。子福者で賑やかなのであります。

当時、羽左衛門さんは、他の方々に比べると榮譽にほど遠い人のようでした。

しかし、ここで辛抱をされたのでした。そして足を地につけて、芸道に精進鍛錬し、後生の為の基本を残したと評されたのであります。天は助くるではありませんが、先代の忍耐と言つ宝物が開いたのであります。

私も一代の禪僧興道老師、樽林、酒井、鈴木、大久保道舟各先生に幸せにも警咳に接し、ご指導賜り最高でした。その示されたところのものを的確に把握し、実践し生活して行かねばならない。有為天変は常の事、益々坐禅の実践が、日常茶飯化して行かねばなりません。